



阿川さんと塩野さんがインタビューのおもしろさを伝授

第7回 森の“聞き書き甲子園”

全国から選ばれた 100 人の高校生たちが“森の名手・名人”に実際に話を聞き、
その技や人となりを「聞き書き」して、次世代に伝えていく
森の“聞き書き甲子園”が今年も始まりました。
その貴重な体験は参加者にとっても忘れられない記憶として刻まれていくことでしょう。

聞き書きで名人に触れ 美しい森林を次世代に

森林が国土面積の七割を占め、「もりのくに」と呼ばれている日本。古くから木とともに暮らし、森林を大切にしてきたこの国では現在、山村の過疎化・高齢化が進み、受け継がれてきた知恵や生活技術、生業が失われようとしています。このような中、平成十四年から始まったのが、全国から高校生たち百名が参加する「森の聞き書き甲子園」F O X F I R E I N J A P A N N E Rです。このプロジェクトは若い彼らが「森の名手・名人（森林に関わる分野において優れた技や知見を持ってその業を究め、生活者の模範となっている

達人）」と直接、コンタクトをとって名人たちの話を聞き、文章にまとめて後世に残そうというもの。日本を担っていく世代に森林の今を社会一般の関心事として知ってもらいたいという想いもこめられています。

その「聞き書き」研修会が八月十一日から十四日にかけて東京都内で行われました。初日の開校式では「名人と真剣に向き合い、森と人とのつき合い方を汲み取ってほしい」という林野庁の挨拶に始まり、実際の「聞き書き」取材の様子を映したビデオを上映。続いて昨年、森の「聞き書き甲子園」に参加した卒業生二人と東京都の白づくり名人、高橋泰一氏とのトークセッションが行われました。集まった高校生たちも、取

材中にテープレコーダーの電池が切れてしまったというリアルな体験談や名人の人間味あふれるお話に笑ったり、驚いたりしてリラックス。テレビでおなじみの作家で名インタビュアーである阿川佐和子さんと、作家の塩野米松さんとの対談コーナーでは実際に壇上へ高校生二組が呼ばれ「インタビュで大事なことは相手を好きになり、興味を持ってみる」となどのアドバイスがなされ、即興でお互いに質問しあう楽しい場面も飛び出しました。

その後は東京都郊外の研修所へ場所を移して、四日間の研修。グループに分かれての聞き書き講習や塩野米松さんによる聞き書き講習、写真撮影講習、名人の話を聞く講義、卒業生による質疑応答などが行われました。

出会ったばかりの高校生たちが寝起きをともにする研修では互いのコミュニケーションを深めました。秋からは各自が名手・名人たちと交流をはかりながら、実際の「聞き書き」の作業を始めます。森の聞き書き甲子園は高校生に新たな発見や感動を与えることでしよう。



上：実習では塩野さんが直接、アドバイス
中：真剣な表情で「聞き書き」を行なっている高校生
下：グループごとに講習で学んだことを実践

参加高校生の声



五嶋みずほさん
静岡県立下田高等学校 2年

「先生にすすめられて参加したんですけど、最初はこういったことをするのか分からなかったし、不安でした。研修所の実践では、話をするより聞くことの方が難しいということを知りました。大変だったけど得られたものが多かったです」



久保育也さん
兵庫県立山崎高等学校 2年

「林業に興味があって、職人の技術を勉強したいと思って参加しました。研修所では全国各地の人たちと友達になることができました。いろんな話が聞けたり、地域によって話し方が違うということも知ることができました」